

第一回 多摩大学

「私の志」小論文コンテスト

（簡易作品集）

主催 多摩大学

後援 高校生新聞社

二〇〇九年十一月十五日

応募数 353作品

## 最優秀賞

### 生き物全てに優しい研究者

私立 学習院女子高等科 二年

杉井 昭子

将来は生物学研究者になり、生き物の謎を解き明かすことで、医療に貢献する。これは、高校に入って生物学の勉強をしたことがきっかけで、私が持つようになった「志」である。目的は勿論、病気に苦しむ人々を救うことなのだ。それだけではない。私は、人間の病気を治すための研究をすることで、人と自然の調和、さらには環境保全にもつながっていくことができると確信している。あまりにも無茶な話ではないか、と思われるかもしれないが、私がこのように考えるのには理由がある。

そもそも、私が初めて生物に興味を持ったのは、小学生の時である。きっかけは、国語の教科書に載っていた、海の生物に関する文章だった。その中でも、私の目を最も釘付けにしたのは、カプトガニという生物についての話題であった。カプトガニは、体内の血液に少しでも菌が入ると、血液がゼラチン状に固まる性質を持っており、その性質をもとに研究が進められ、現在の医療に重宝している、という内容だった。高校生になって再び生物への興味を持つようになり、私はかつて自分に衝撃を与えたカプトガニについて深く知りたいたい、情報収集をした。すると、意外な事実が明らかになった。今は貴重とされているカプトガニだが、まだ血液の性質が発見されていなかった頃は、海で漁をする際、網を破ることで迷惑な生物として嫌われ、多くのカプトガニが殺されていたという。だが、血液の発見により、研究者らがカプトガニを保護すべきだと主張し、現在では保護されている。発見前は、嫌われ者から役に立つ性質が見つかるとは、思いもよらなかったのだろう。それならば、現代

で嫌われている生物からも、人間に役立つ性質を見つけられるのではないだろうか。

現代で嫌われている生物といえば、ゴミをあさるカラス、人の血を吸う蚊、果実を食い荒らすケムシが挙げられる。これらの生物を人間に役立てるとすると、無理な話のようだが、全く可能性がないとは言えない。間接的に役立つこともあるのだ。例えばシヨウジョウバエは、人間の生活に直接役に立つ訳ではないが、遺伝子情報が人間と似ているために、人間のガンの研究など、様々な研究に利用されている。嫌われる生物が人間の役に立てるかどうかは、研究者の発見にかかっている。

嫌われている生物をそのまま受け入れるのは難しいことである。仮に誰かが、「生き物を嫌うのは良くない」と強く主張しても、迷惑な面ばかりが目立ち、人々は嫌いな生物を好きになることができない。しかし、研究者が、嫌われる生物の役に立つ面、つまり良い面を見つけ、それを公表すれば、その生物に対する人々の見方はわずかも変わってくる。良い面が見つかったから、その生物の嫌われる原因と向き合い、生物を傷つけることなく解決する方法を見つけられたならば、この生物は嫌われ者を卒業し、より快適に暮らすことができるのだ。

このことは人間同士の付き合いにも言える。嫌いな人を素直に好きになることはできない。学校の先生が、「Aさんを嫌うな」とクラスで呼びかけても、なかなか改善されないのが現実である。だが、クラスの中の誰か、あるいは先生が、Aさんの良い面に気づき、周りの生徒にも気づかせることができれば、状況は変わっていく。誰かが良い面を見つければ、嫌われ者が人気者へと変身することも可能なのである。良い面が全く無い人間はいない、というのはよく言われることだが、生物においても、良い面を持たないものはいない、と私は考える。たとえ毒を持ったヘビでも、体の柄がおしゃれであったりする。これは、ヘビが大嫌いだっただけで、生物学を勉強するならば苦手意識をなくそうと思えば、克服する過程で見つけたヘビの良い点である。実際に、ヘビの柄はファッションに活かされている。

人間は、嫌いな生物を殺して解決しようとする。殺虫剤が典型的な例である。だが、カブトガニの場合、嫌われていた頃に多くが殺されたことで、必要となつた今は少なくなっている。同じ失敗をくり返してはいけないのだ。今は嫌われていても、未来になつて貴重とされる可能性はある。未来に後悔しないために、早めに良い面を見つけるべきである。

冒頭で、人間の病気を治すための研究が、結果として人と自然の調和や環境保全へとつながると主張したが、ここで理由を明らかにしたい。人間の病気の治療には、昔から生き物の力が利用されてきた。生き物の力とは、即ち生物の良い面であり、良い面が解明された生物たちは重宝され、カブトガニのように、嫌われ者から人気者への変身を遂げたものもいる。ならば、現在嫌われている生物からも、良い面を見つけることはできるはずである。嫌われている生物に限らず、今は貴重にされていない生物でも、そこから「生き物の力」が見つかり、人間にとつて大事な存在となれば、保護されて安全な生活が営めるようになる。安全な暮らしを手に入れる生物が増えれば、絶滅する生物は減る。それは生物多様性を保つことであり、人と自然が調和して生きることにつながる。また、保護される生物が増えれば、人間が住む土地をつくるための、生物のすみかの破壊が減る。これは、生物が住む自然を守ることになり、環境保全に結びついていくのである。ここまで到達するには長い道のりを要するが、そのための第一歩が、「生き物の良い面を見つけること」であり、この役割を担うべきなのが、研究者である。安心で豊かな生活は、人間のみならず、他の生き物全てが共通して望むものなのだ。だから私は、生き物の長所を見つけ、それを病気の治療に活かすだけでなく、医療に貢献してくれた生き物に感謝をし、安全で幸せな生活を保障してあげられるような研究者になることを、「志」にするのである。

## 優 秀 賞

### 挑戦

富山県立 南砺総合高等学校福光高等学校 三年

斉藤 智佳

私は今、作業療法士を目指し頑張つて勉強しています。作業療法士という仕事に興味をもったきっかけは、高校一年生のときの学校での進路講座でした。私は怪我が多く、よく整形外科や接骨院の先生、また、スポーツトレーナーの方にもお世話になったことがあり、もともと「心から人の支えになってあげられる」仕事に魅力を感じていました。その時に知ったのが作業療法士という仕事だったのです。

私は「作業療法士になるには」という本を読んで、作業療法士が「やりたい仕事」から、「挑戦したい仕事」に変わりました。その本には、実際の作業療法士の体験談や、仕事の内容、なるために必要なことなどが書いてあり、作業療法士がどのような人と接していかなくてはならないのか、どのような壁に直面するのかなどがよく分かりました。どの作業療法士の体験談にも、「やりがいがある」というようなプラスな言葉があるにも関わらず、私の心には「甘い仕事ではない」というマイナスに近い印象のほうが強く残ったというのが正直なところです。でも私は、その本を読んでさらに、今の目標へ向かう気持ちが強くなりました。

その理由の一つは、自分が作業療法士に向いているのではないかと思う点がいっつかあったからです。

「作業療法はその人に合った治療法にするために工夫する必要がある」というようなことが書いてありました。私は今、なかなか手につかない勉強にある工夫をしています。その工夫とは、ふで箱、下じき、ノートなど、勉強で

使う文具を自分の好きなキャラクターでそろえ、それを使いたいという気持ちに誘われて勉強に対して少しでもやる気を起こさせようというものです。ただ単にやっている、嫌々やっているというよりも、目標をもってやっている、進んでやっているというほうが、同じ「やっている」でも効果があると思います。実際の作業療法でも、その人に合った作業を選ぶとき、「その人のこれまでの生活や仕事、価値観などからかけ離れた作業活動にならないように注意する必要」があり、「本人自身がその作業活動を好むかどうか」という点を配慮することも重要「なのです。私が自分自身について考えたように、どうすれば嫌なことでもやる気になれるのか、どうすれば効率があがるのかということとを、自分以外の人のために考えるというのに魅力を感じます。もちろん、自分のことを考えるよりもはるかに他人のことを考えるのは難しいことです。が、もしそれで上手くやる気を起こさせることができたとしても嬉しいと思います。また、私はピアノを弾くことができるので、その人が音楽に興味がある人なら一緒に音楽を楽しみながら治療ができるかもしれません。

そして最大の理由は、この仕事を通して今の自分を改善できるかもしれないと思つたからです。

私は仲良くなりたと思う人には、仲良くなれるように、自分を好きになつてもらえるように努力します。でもその一方、苦手なタイプの人とはかなり距離をおいてしまいます。そのほうが安全だから。うまくいくから。でもそれはぶつかることから逃げていただけだと思います。これは例ですが、私はつらいこと、嫌なことから逃げる傾向があります。作業療法士はあらゆるタイプの人と接していかねばなりません。苦手な人がいるかもしれませんが。それでもその人と接して、その人のことをよく知って、何かしてあげなければいけません。絶対に逃げられないのです。向き合わなければならぬのです。作業療法士は、相手だけでなく自分と向き合う機会がとても多い仕事だと思えます。また、それだけでなく、たくさんの人と出会い、いろいろな人がいて、いろいろな考え方があることを知って、患者や利用者の人たちから多くのことを学ぶことができます。これはまさに自分を変えるのにびっ

たりな場所だと思えます。厳しいからこそ、得られるものは大きいのではないのでしょうか。その中で、逃げずに一歩踏み出せる自分になりたいです。

私は進路を決めるにあたって、「本当に作業療法士になりたいのだろうか」「自分がやりたいと思っていることは作業療法士の仕事なのだろうか」と、何度か思い悩みました。でも、実際に作業療法士に助けられたという人の話を聞いたり、見学会に参加したり、そしてその本を読んだことで作業療法士についての知識が増え、気持ちが変わってきています。私にとって作業療法士とは「やりたい仕事」というよりも、「挑戦するべき仕事」であり、「挑戦したい仕事」です。今、作業療法士を目指すことは、学力的にも「挑戦」であり、自分自身を変える「挑戦」です。もう私の「挑戦」は始まっています。

## 優秀賞

### 将来の夢

私立 大妻高等学校 一年

関根 萌実

私は本が好きだ。幼稚園の頃からずっと絵本を読んでいたせいかな、高校一年生になった今でも絵本をたまに買うし、専門書も読んだりする。私が一年間で使うお金のほとんどは本にあてられているといっても過言ではないと思う。クリスマスプレゼントも、誕生日もたいてい図書カードである。駅で時間を持て余すと本屋へ行き、服を買うために大きなデパートに行っても本屋へ行く。

ただだと私の本への愛情について述べてきたが、それくらい好きなのだ。私は本に囲まれていれば幸せだし、本がこの世から消えたら私も消えようと思っている。

そんなわけで、私の将来の夢は「司書」である。

最近では、若い人々の本離れ、活字離れが増えているといわれている。私の身の周りでも、それは例外なく起っている。残念だと思っている。なぜ嫌いなのかをたずねると、大体「つまらない」、「読むのがめんどろ」という理由がほとんどだ。「読むのがめんどろ」なのは、今の私にはどうすることもできない。しかし、「つまらない」のは何とかなりそうな気がする。友達からこの言葉を聞いたとき、「あ、私は将来、こういう人にこそ本を読んでもらいたいんだ。私の志はコレだ。」と思ったのを覚えている。

「つまらない」の意味は二通り考えられる。一つめは「読んだらつまらなかったから本が好きではなくなった」パターンだ。これは、本選びがあまり上手ではないから起るのだと思う。私の志を成しとげるための第一歩として、こ

の本選びを成功させてあげることがある。そしてこれは「司書」にもつながる。相手が要求している本を、適切に選んでいくか持つて来て、更にしぼる、という方法を使つて対応すれば、このパターンは何とかなる。そして、「これ、おもしろかった!」と言つてもらえれば、少しは本のおもしろさを分かつてもらえたと思つて良い。もう一つのパターンは、「本にはつまらないイメージがある」パターンだ。これは活字嫌いな場合が多い。しかしよく考えれば、みんなが見て感動するドラマも、涙が出るほどおもしろい映画も、元は活字からできていることがわかるだろう。「本にはつまらないイメージがある」人は、自分がおもしろいと思つた映画の本や、その原作を読むと良いと思う。そうすれば、だんだんと他の種類にも目がいくようになる。

本に関して確実に言えることは、「本を読めば、知らなかったことを知ることができ、もつと知りたくなる」ということだ。例えば、読んでいる本の中に知らない言葉が出てきた、とか、読んでいる本の主人公が読んでいる本があった、なんていうときは、またそれらについて調べられる。そうやって自分の内面に磨きがかかり、深さが増して、濃く厚く頑丈なものが築かれる。恥かしい大人にならなくてすむ。自分と他人の違いがわかるようになる。つまり成長することができる。よく効く薬が手元にあるのに使わない人がいるだろうか。同じように、自分を成長させてくれるものがあるのに手を伸ばさないなんてもつたいたいと思わないのか。大げさに聞こえるかもしれないが、本の大切さに気づくのはより早い方が良いのだ。本好きな人にはわかるだろう。本によって価値観が変わること、世の中に知っている言葉が増えたこと、今まで苦手だった固い本が読めるようになることが、つまり、自分が成長したことが。

私はこれらのことをより多くの人に伝えたい。司書になれば、イベントを通してより多くの人にこの考えを伝えることができる。また、本に苦手意識をもつ人にも、本を読みたくなくなるきっかけをつくることができる。

私は、たくさんの人に本の楽しさをわかつてもらえるような司書になりたい。

## 優秀賞

### 「存在」が「誇り」

私立 仙台白百合学園高等学校 三年

半澤 彰子

私は特別支援教育教員を目指している。自分の体験を体験のままでも終わらせたくないからだ。

私には、自閉症という障害を持った妹がいる。幼い頃は多動や睡眠障害、偏食やこだわりがひどく、また言葉の遅れがあったため、自分の感情を上手く周りに伝えることが出来ずにパニックを起して泣き叫ぶといったことの連続だった。今となつては笑話の一つになつているが、母が買い物に出掛け、私がトイレから出てきた時には玄関から外に出る寸前で、驚きと焦りと思わず私の方が叫びそうになつた(いや、実際に叫んでいたかも知れない)、というこゝともあつた。

そんな妹は一歳半から半年ほど、市の発達障害支援センターの母子クラスに通い、就園前の一年間は母子通所施設に通つていた。当時、中学一年生だった私は、総合学習での個人研究のためにそこへ出向き、妹以外の子ども達ともかかわり、職員の方からお話を聞く機会に恵まれた。そして、障害児だけではなく、その家族に対する支援も同じように大切なのだというこゝを知つた。

しかし、行政が福祉面―特に障害児福祉においては他の都市に比べて圧倒的に遅れていることで、そのような支援を充分に行える機関が少なすぎる、という声も聞かれた。その話を聞いてから数年が経つた今でさえ、療育手帳の発行数を減らすために、発行に必要な検査を受けさせる時期を出来る限り遅らせているという現状がある。行政は、社会は、本当に子どもが大

切なのだろうか。それとも大切なのは健常児だけなのだろうか。先の市長選では、各候補者が様々なことを主張していたが、「不備」とも言えるこの状況をどのように改善していくか、明確な意見は残念なことに関こえてこなかつた。

一部の行政でこのような状況が見られるものの、一般的に発達障害そのものに対する理解は広まってきた。しかし教育現場での対応は追いついていない。発達障害の中でも知的な遅れを伴わないものは、周りとの差が明らかになつてくる小学校中学年から中学生の間に見えてくることが多いのだが、それを「障害」ではなく、「わがまま」だとか「親の躾がなつていない」などといった「問題児」として扱う。障害の特性を理解し、上手にフォローすれば問題なく過すことが出来るのに、それが無いために、周りから馬鹿にされたりイジメを受けたたりして、心に深い傷を負つてしまう。また、本人だけではなく家族もまた冷たい視線で見られ、兄弟児にとってはイジメの原因となり、やはり傷付く。

発達障害は適切なケアをすれば、障害ゆえの発達の遅れや偏りは改善していくことが可能だ。より早期からケアを行えば、より良い改善が見られる。それは、障害の発見が早くケアを長い間施されてきた妹と、発見が遅くケアも遅れてしまった弟を見てきたことで痛感している。こうして私は、早期に障害を見付け適切なケアを行える人も必要だが、ある程度年齢が高くなつてから障害が見付かった子どもにもケアを行える人も必要なのだと考えるようになった。それが、中学校・高校での特別支援教育教員を志すようになったきっかけだ。

「特別支援教育に興味を持つきっかけは、障害のある弟妹との日々だった。」

そう言えるのが私の中での微かな自負だった。ところがある時、ふと疑念を抱くようになった。それは、高校一年生の冬に自分史を執筆した時のこと。自分の生い立ち、進路を説明する上では欠かせない、弟妹とのかかわりを書こうとして、手が止まつた。果たして弟妹は本当に自分の障害を周囲の人達

に包み隠さず話されることを望んでいるのだろうか。勿論周囲の人達には、少しでも弟妹のことを認めて欲しい、受け入れて欲しい、という思いで今まで話してきたのだが、成長した弟妹に、

「本当は言つて欲しくなかつたんだけど……。」

などと言われたらどうしようか。私自身のことなのに、弟妹の障害を「利用」しているような気がした。弟妹の障害を持ち出さなければ語れない自分――私自身のアイデンティティが何処にも無いようで、悲しかった。その悩みを誰かに打ち明けることも無く、一人悶々と悩んだ。

それでも私は、進路や将来の夢を曲げなかつた。「曲げられなかつた」の方が正しいのかも知れない。他に自分のやりたいことを見出せなかつたこともあるが、どうしても諦めきれなかつたのだ。そんな時に偶然読んだのが、竹中ナミさんの話だつた。

彼女には、心身に重度の障害を持った娘がいる。その娘の成長を願い、障害者のためのボランティア活動に参加し、障害者に対する日本の福祉制度に関心を持つた。そして、障害者の働く場所が無いために、その両親の働く機会が奪われていることに気付いたという。彼女はそんな現状を変えようと、障害者の雇用支援をする「プロップ・ステーション」という団体を立ち上げた。

この話を通して、障害を持つた家族とのかかわりが今の自分を自分たらしめているのだという考えは、決して間違つてはいないのだと思つた。また、私と似たような悩みを抱いている人は他にもいるのではないかと考えるようにもなつた。特別支援教育教員は、障害児とのかかわる機会は勿論、その家族とのかかわる機会も多いはずだ。障害を持つ人とその家族を取り巻く現状が非常に厳しい中で、障害を持つ家族がいること、またそのような家族とのかかわりは、自分自身の人生での糧になりこそすれ、マイナスになることは決して無いと伝えていくこと、それが私に出来ることではないだろうか。いや、障害があるが無かろうが、家族の存在というものはとても大きいのだと伝えていけるはずだ。

将来、弟妹に、

「君達の『障害』ではなく『存在』が私の誇りだよ。」  
と、自信を持つて言える人間を目指し、私はしっかりと自分の道を歩んでいきたい。



## 佳作

### 『農に生きる』

磐田農業高等学校 二年 石貝亮二

### 『山に魅せられた我が志』

大妻高等学校 一年 林田紗帆

### 『私を支える「志」』

横浜雙葉高等学校 一年 深沢聖

### 『私と短歌』

下館第一高等学校 二年 島田瞳

### 『白衣の天使に憧れて』

宮崎大宮高等学校 二年 前田博美

### 『芸術を志す者として』

北筑高等学校 二年 津田崇博

### 『夏の空を見上げて』

早稲田実業学校高等部 三年 山本姫子

### 『私が目指す数学教師』

多摩大学附属聖ヶ丘高等学校 二年 永井幸貴

### 『パティシエ』

日体荏原高等学校 三年 中原貴恵

### 『教育革命』

國學院大學久我山高等学校 二年 中村若菜

第一回 多摩大学  
「私の志」小論文コンテスト

2009年11月15日

主催 多摩大学

後援 高校生新聞社・社団法人 全国経理教育協会  
社団法人 全国工業高等学校長協会